

研究ノート

学生の認知症に関する知識

久 世 淳 子

日本福祉大学 情報社会科学部

奥 村 由美子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部

A study on university students' knowledge about dementia

Junko Kuze

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Yumiko Okumura

Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare

Keywords: 認知症に関する知識, 認知症の認識, 認知症高齢者のイメージ

1. はじめに

高齢者人口の増加にともない認知症高齢者数も増加している。高齢者介護研究会報告書『2015年の高齢者介護』（2003年6月）によれば、何らかの介護・支援を必要とし、かつ認知症がある高齢者は、2015年までに250万人、2025年には323万人になると推計されている。この推計をもとに、平成19年版の厚生労働白書では「これから高齢者介護においては、身体ケアのみではなく、認知症に対応したケアも標準として位置づけていくことが必要となっている」とされている。そのためには、認知症に対する正しい認識や知識が必要となる。

海外では認知症に対する知識を評価するためのテストが作成されており¹⁻²⁾、介護者を対象とした調査も行われている³⁻⁵⁾。日本でも、一般住民⁶⁾や一般高齢者⁷⁾を対象とした調査、あるいは介護者⁸⁾やグループホーム従事

者⁹⁾を対象とした調査などが知られているが、あまり数が多いとはいえない。学生を対象とした調査では看護学生を対象として認知症高齢者のイメージを測定したものが多い（たとえば、木村と片岡¹⁰⁾など）、研究者が独自に認知症に関する知識調査を作成することもある（たとえば、柴田¹¹⁾など）。そこで本研究では、認知症についての知識を測定するための標準的なテストについて考える手始めとして、大学生の認知症に関する知識の実態について調べることにした。

2. 方法

2.1 調査対象者

調査対象者は大学生194名（男性85名、女性109名）で、2006年5-6月、および10月に講義中に無記名で集団実施した。調査対象者の平均年齢（標準偏差）は

20.0 (.96) 歳であった。このうち高齢者との同居経験がある者は103名(53.1%), 介護・看護経験がある者は34名(17.5%)であった。また、認知症高齢者と実際にかかわったことがあるのは42名(21.6%)であった。

2.2 調査項目

対象者の基本属性以外の調査項目は、(1) 認知症に関する知識、(2) 認知症高齢者に対するイメージ、(3) 健常高齢者に対するイメージ、および(4) 高齢者との関わりである。ここでは(1) および(2) について分析する。

2.2.1 認知症に関する知識

認知症に関する主観的な知識の程度、および認知症に関する知識をたずねる項目からなる。認知症に関する知識をたずねる12項目は、一般住民⁶⁾や一般高齢者⁷⁾を対象とした調査を参考に作成した。これら12項目については「はい」、「いいえ」の2件法で回答を求めたが、認知症の相談先を知っているかなど、正誤を問えない設問が2項目含まれている。そのため、認知症に関する知識度得点の算出には、正誤を問う10項目を用いた。

2.2.2 認知症高齢者に対するイメージ

先行研究で用いられた以下の3種類の方法を用いて認知症高齢者のイメージを測定した。ここでは、(1) および(2) について分析する。

(1) 認知症の認識: 杉原ら⁷⁾の10項目を使用し、「そう思う」、「どちらともいえない」、「そう思わない」の3件法で回答を求めた。

(2) 認知症高齢者イメージ: 奥村ら¹²⁾が用いた9項目について6件法で回答を求めた。

(3) SD法: 保坂・袖井ら¹³⁾が高齢者イメージの測定に用いた50対の形容詞対について7件法で回答を求めた。

3. 結果

3.1 認知症に関する知識

正誤を問う10項目の正答率は50.5-97.9%であった(表1)。もっとも正答率が高かったのは「周囲の人の適切なかわりが、認知症の進行を緩和できる可能性がある」で、もっとも正答率が低かったのは「認知症には、治るものと治らないものがある」であった。

10項目のうち正答した数を認知症に関する知識度得点として用いた。認知症知識度得点の範囲は5-10点

表1. 認知症に関する知識(10項目)の正答率(%)

問 題	正答率
年をとると必ず認知症になる	94.8
認知症は病気である	60.8
認知症には、いくつかの種類がある	91.2
認知症には、治るものと治らないものがある	50.5
物忘れ(記憶障害)があると、必ず認知症と診断される	95.9
認知症は初老期(65歳以下)でも起こることがある	95.4
認知症になると、かならず徘徊行動がおこる	92.3
認知症になっても感情を伴う出来事は覚えていることがある	86.6
認知症には、治療法はまったくない	90.7
周囲の人の適切なかわりが、認知症の進行を緩和できる可能性がある	97.9

で、平均(標準偏差)は8.7(1.10)点であった。そこで、認知症知識度得点を5-8点(知識低群:71名)、9点(知識平均群:72名)、10点(知識高群:45名)の3群に分け、認知症高齢者イメージとの関連について検討することにした。なお、3群の男女比($\chi^2(2)=0.34, ns$)、高齢者との同居経験($\chi^2(2)=0.92, ns$)、介護・看護経験($\chi^2(2)=0.96, ns$)には差がみられなかった。

3群の認知症に関する主観的な知識の程度については図1のようであった。「認知症についてよく知っていると思いますか」という設問に対しては、いずれの群でも7%が「はい」と回答しており、20-30%が「いいえ」と回答していた。 $(\chi^2(4)=1.71, ns)$

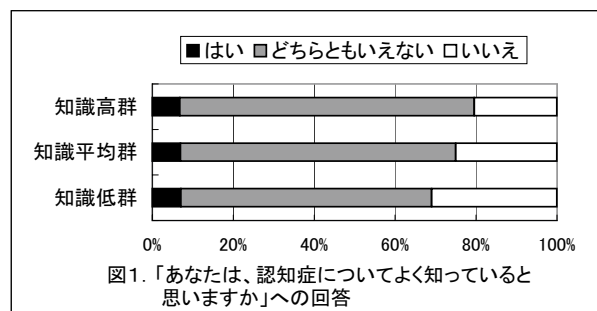
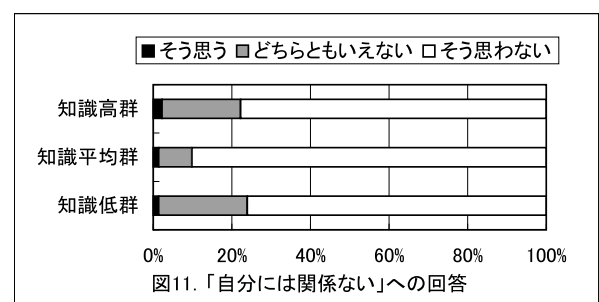
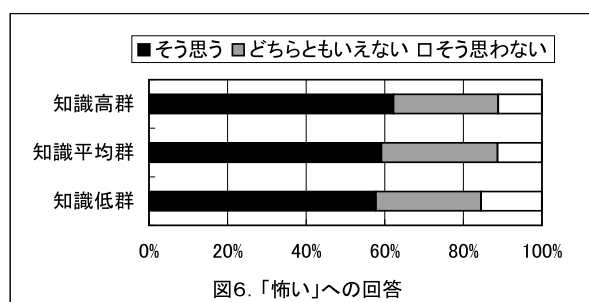
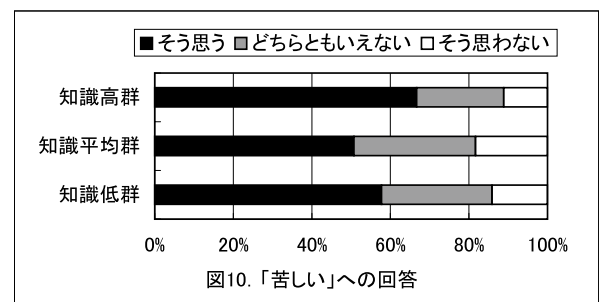
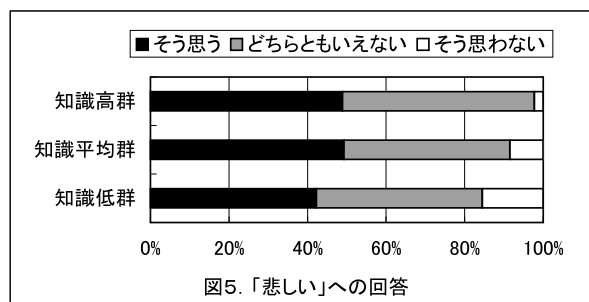
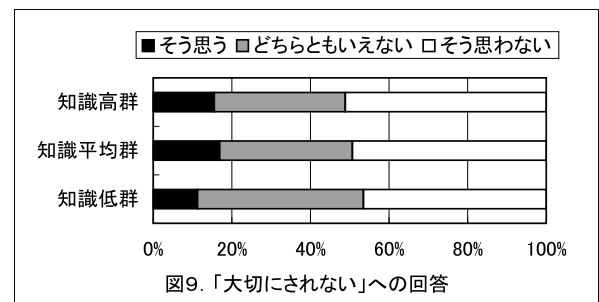
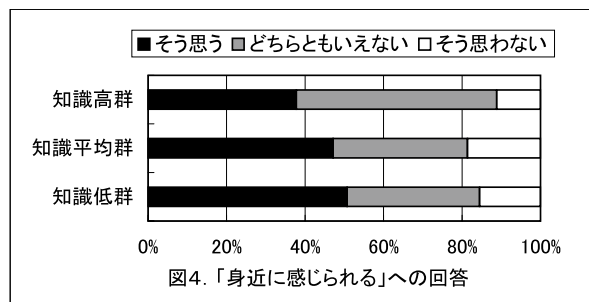
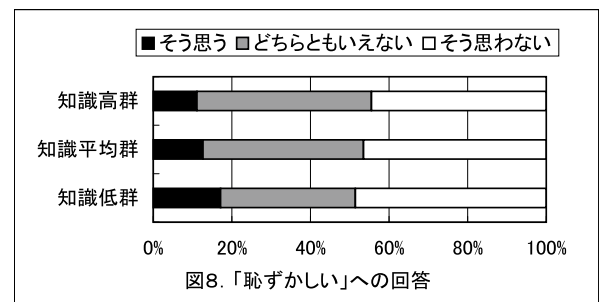
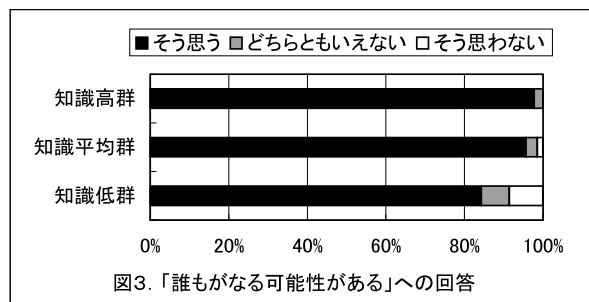
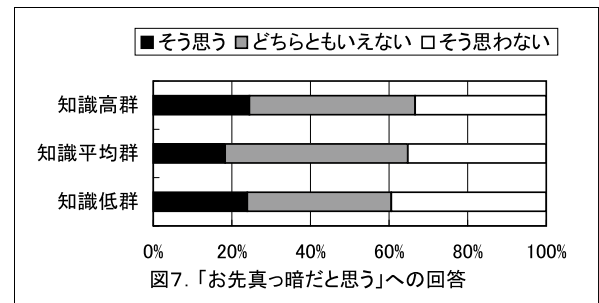
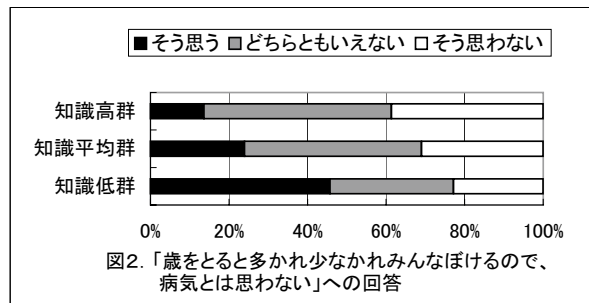


図1. 「あなたは、認知症についてよく知っていると思いますか」への回答

3.2 認知症に関する知識と認知症の認識および認知症高齢者イメージとの関連

3.2.1 認知症に関する知識と認知症の認識

認知症に関する知識の程度によって認知症の認識が異なるかどうかを調べるため、知識低群、知識平均群、知識高群の回答を比較した(図2-11)。「そう思う」と答えた学生の割合が多かったのは「誰もがなる可能性がある」(図3)、「怖い」(図6)、「苦しい」(図10)であった。「そう思わない」と答えた学生の割合が多かったのは「自分には関係ない」(図11)、「大切にされない」(図9)、「恥ずかしい」(図8)であった。「歳をとると多かれ少なかれみんなぼけるので、病気とは思わない」(図2)については、知識高群の方が「そう思わない」という回答が多く($\chi^2(4)=15.3, p=.004$)、「誰もがなる可能性がある」(図3)については、知識



低群の方が「そう思わない」という回答が多かった ($\chi^2(4)=9.8, p=.04$).

3.2.2 認知症に関する知識と認知症高齢者イメージ

認知症に関する知識の程度によって認知症高齢者イメージが異なるかどうかを調べるため、知識低群、知識平均群、知識高群のイメージを比較した。3群の結果はよく似ているので、図12には知識低群と知識高群の結果を示した。いずれの群も右によっており、認知症高齢者に対して否定的なイメージを抱いているといえる。9項目すべてで3群間に有意な差は見られず、知識の程度によって認知症高齢者のイメージに差はみられなかった。

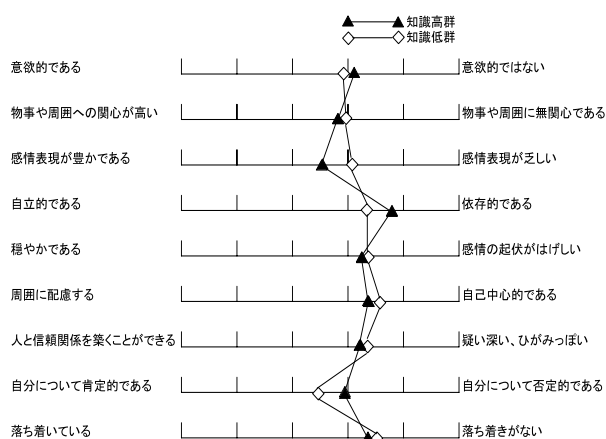


図12. 認知症高齢者のイメージ

4. 考察

4.1 認知症に関する知識

正誤を問う10項目の正答率は50.5-97.9%であり、正答率が高かったといえる。しかしながら、主観的な認知症に関する知識の程度と実際の知識にはズレがみられており、この点についてはさらに詳細に検討する必要がある。

4.2 認知症の認識

認知症の認識については、杉原ら⁷⁾が使用した10項目を用いた。これらの項目は、本間⁶⁾の6項目に杉原らが作成した4項目を加えたものである。「誰もがなる可能性がある」、「苦しい」、「恥ずかしい」については本間の作成した項目をそのまま使用しており、「身近に感じられる」、「怖い」、「たいせつにされない」については表現を変えて使用している。回答形式については、杉原らは「あてはまるものをいくつでも選択

できる」という回答形式としたが、今回は本間と同じく「そう思う」、「どちらともいえない」、「そう思わない」の3件法で回答を求めた。

杉原らの結果では回答が多かった順に「歳をとると多かれ少なかれみんなぼけるので、病気とは思わない」が75%、「誰もがなる可能性がある」が44.1%、「身近に感じられる」が42%、「悲しい」が41%であった。今回の結果と比較すると、回答形式や対象者が異なるとはいえ、認知症が病気であり誰もがなる可能性があるという認識が浸透していることがうかがわれる。

本間は首都圏および大阪市、仙台市に居住する一般住民を対象として調査を行っており、今回と同じ項目である「誰もがなる可能性がある」、「苦しい」、「恥ずかしい」という3項目について比較することができ、本間では「恥ずかしい」に「そう思う」と回答した人が約15%、「そう思わない」と回答した人が約65%で、今回の結果とよく似ている。「苦しい」については地域差がみられており、「そう思う」と回答した人が最も多かった首都圏で50%と、今回より少なかった。「誰もがなる可能性がある」については、本間では65-70%であったが、今回は80%をこえる学生が「そう思う」と回答している。本間の結果と比較しても、「誰もがなる可能性がある」、あるいは「苦しい」という認識が広まっているといえよう。

4.3 認知症に関する知識と認知症高齢者イメージとの関連：今後の展望

認知症高齢者イメージとして測定した9項目では、認知症に関する知識の程度による違いはみられなかった。しかしながら、認知症の認識としてたずねた「歳をとると多かれ少なかれみんなぼけるので、病気とは思わない」、あるいは「誰もがなる可能性がある」という項目については、知識の程度によって回答が異なっていた。これらの結果は、認知症に関する知識を測定するためのテスト作成に1つのヒントを与えてくれるであろう。認知症についての研究が進むにつれ、われわれの認知症についての知識も増えていく。認知症についての知識を測定するためのテストを作成することは容易ではないが、目的に応じたテストを作成することは重要であろう。

謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「加齢および高齢者に関する知識とイメージを測定するテストの開発」（代表者：奥村由美子）の助成を受けた。

引用文献

- 1) Dieckmann L, Zarit S H, Zarit J M, Gatz M : The Alzheimer's Disease Knowledge Test. The Gerontologist, 28(3), pp.402-407 (1988)
- 2) Gilleard C, Groom F : A study of two dementia Quizzes. British Journal of Clinical Psychology, 33(4), pp.529-534 (1994)
- 3) Werner P : Correlates of family caregivers' knowledge about Alzheimer's disease. International Journal of Geriatric Psychiatry, 16(1), pp.32-38 (2001)
- 4) Graham C, Ballard C, Sham P : Carers' knowledge of dementia, their coping strategies and morbidity. International Journal of Geriatric Psychiatry, 12(9), pp.931-936 (1997)
- 5) Proctor R, Martin C, Hewison J : When a little knowledge is a dangerous thing...: a study of carers' knowledge about dementia, preferred coping style and psychological distress. International Journal of Geriatric Psychiatry, 17(12), pp.1133-1139 (2002)
- 6) 本間昭：地域住民を対象とした老年期痴呆に関する意識調査. 老年社会科学, 23(3), pp.340-351 (2001)
- 7) 杉原百合子, 山田裕子, 武地一：一般高齢者がもつアルツハイマー型認知症についての知識量と関連要因の検討. 日本認知症ケア学会誌, 4(1), pp.9-16 (2005)
- 8) 本間昭：痴呆性高齢者の介護者における痴呆に対する意識・介護・受診の現状. 老年精神医学雑誌, 14(5), pp.573-591 (2003)
- 9) 清水祐子, 新田静江, 望月紀子, 上村奈美：グループホーム従事者の精神的健康度および認知症の行動・心理症状への対応に関する知識の実態. 山梨大学看護学会誌, 5(2), pp.39-45 (2007)
- 10) 木村誠子, 片岡万理：看護覚醒の老年看護学実習における認知症高齢者イメージの特性——一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージの比較——. 高知大学学術研究報告, 55, pp.37-43 (2006)
- 11) 柴田雄企：短期大学女子学生の痴呆性高齢者イメー

ジと高齢者イメージ. 大分県立芸術短期大学研究紀要, 42, pp.59-66 (2004)

- 12) 奥村由美子, 谷向知, 久世淳子：高齢者とのかかわり度合いによる痴呆性高齢者のイメージの違いについて. 老年社会科学, 24(2), pp.262 (2002)
- 13) 保坂久美子, 袖井孝子：大学生の老人イメージ S D法による分析—. 社会老年学, 27, pp.22-33 (1988)